

第13回 森を育てる会勉強会報告

「カブトムシの森勉強会 ～06年版保全計画を

検証し森のこれからを考える～」

1992年、福岡市は市民が生物と親しむことを目指し「カブトムシの森整備事業」に着手しました。スギ林だった場所は伐採・造成されクヌギ等が植栽されました。

1995年苗木が草に覆われ始めた頃、油山自然観察の森（以下施設）は森を育てる市民の誕生を願い通年行事「森を育てる会」を開始しました。これが会の始まりです。

植栽された木が育ち、間伐が必要になってきた02年、行事から団体になっていた会は整備事業計画書・油山自然観察の森の将来像ワークショップ報告書等上位計画を読み、施設や管理者とはかりカブ森保全計画をつくりました。現在の活動は06年度に更新した計画に基づいています。着々と実行されて3年、検証の時を迎えたという声が高まり、勉強会を開催することになりました。講師は学生時代より油山の森林に親しみ、森会第1・2回勉強会講師をされた 朝廣和夫さんをお願いしました。

【日時】2009年8月30日

10:00～15:00

【講師】朝廣和夫氏

九州大学芸術工学院 準教授

【内容】施設の活動、会の活動について

講義・現地見学・ワークショップ

《油山自然観察の森の活動について》

森会担当 山口蘭レンジャー

自然観察の森は市民が自然に親しむことを目



的とした施設。油山は照葉樹林、落葉樹林、アカマツ林、ヒノキ林など様々な種類の森林があり、多くの植物が生育している。また渓流があることで多様な生き物が生息する。施設は行事、展示、広報等で市民に自然の魅力を伝えている。またそれらの基礎として生物調査、環境管理も行い、管理は森会に協力を受けている。

《森を育てる会の活動について》

代表 鎌田隆

会はカブ森、アカマツ林で保全活動を行っている。竹侵入地では調査。02年に作成した会のカブトムシの森保全計画の基本理念は「里山に代表される二次林（具体的にはクヌギ・コナラを主とした林）の自然環境を復元する作業を行い、その象徴としてカブトムシなどの甲虫類が生息・観察できるような森づくりを目指す」ということ。06年の計画を振り返り今後の活動を考えていきたい。

《講義》

◆ 生き物の住みか里地里山とその危機

日本では現在希少な生物種の5割が里地里山に生息している。国土の多くは手を入れなければ照葉樹林となる気候・土地条件。人が土地を棚田・ため池・草地・農業用林・薪炭林などの里地里山として利用してきたため照葉樹林以外の環境が成立しそれぞれの場所を好む生き物が住んできた。しかし2000年余り維持された環境は手入れをしなくなったことで減少し、減少した環境を住みかとしてきた生物も減った。生物多様性の危機は 開発、外来種の他にこのような管理放棄も原因。

◆ ボランティアに期待すること

現代の里地里山への関わり方のひとつエコツーリズムの基礎となる考えは地域産業振興、地域振興である。

昔は農林業や農村の生活の中で環境に手が入り、生き物の住みかができていた。昭和30年代以降の産業構造、エネルギーの変化により産業、暮らしの中でおのずと里地里山を利用・維持する、ということができなくなった。このような状況下、農村の環境保全の担い手はボランティアではないだろうか。それは地域と連携して行うことが必要となる。

しかし一般的な宿泊を伴うエコツーリズムは敷居が高いことがある。毎週自宅近くで保全活動することはボランティアツーリズムと言えよう。油山はボランティアツーリズムのひとつの拠点となる可能性をもっている。

◆ 日本では環境教育と環境管理は両輪

川島直氏（キープ協会）は環境教育の要素として環境調査、環境管理、自然解説をあげている。日本の自然は手入れを通じて保全され

てきた。だから環境管理をどう充実させるかが環境教育のキーとなると訴えている。

◆ 雑木林の4種類の伐採更新等管理方法についてイギリスの事例をひいて説明する。

① ハイフォレスト

10mを超える高木を育てる。

② コピス

萌芽更新をサイクルをもって行う。

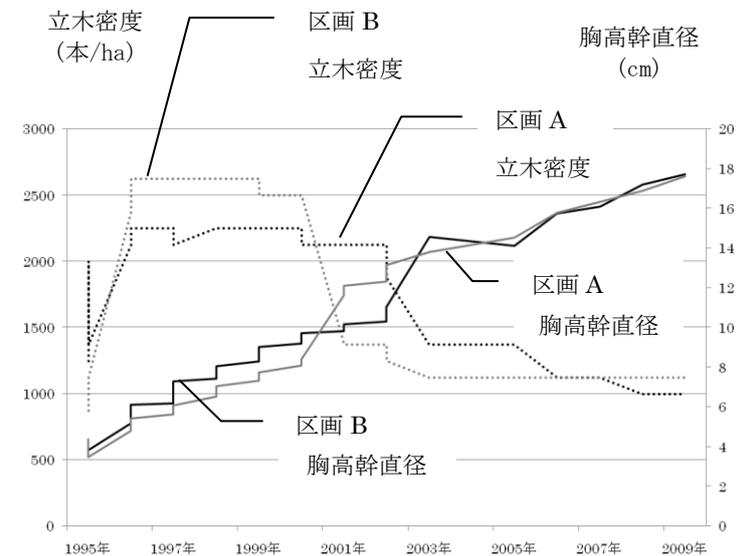
③ コピス ウィズスタンダード

高木の間で萌芽更新を行う。

④ 台仕立て

シカの口が届かないところで木を切り高い位置で萌芽更新を行う。

◆ クヌギ生長調査から読み取れる森の今



1995～2009年の福岡市自然観察の森カブトムシの森のクヌギ林区画A、B地区の胸高直径と立木密度の推移 (図の作成：朝廣和夫)

会が行っているクヌギ生長調査（調査地：カブ森の観察小屋そばの隣接する10m×10m×2 小区画、1995より継続、世話役：

阪下龍雄)についてコメント。2002年に立木密度がへっている。間伐開始と思われる。間伐により直後幹直径が大きく増えている。その後徐々に間伐がすすみ直径も同様に大きくなっている。

重松敏則氏が大阪の公園で間伐密度を変えてコナラの生長量を測った調査によると林内の明るさを示す相対照度から50%のときコナラは生長が最もよいとのこと。(『市民による里山の保全・管理』信山社サイテック67p 会蔵)50パーセントとは500本/haの密度。今カブ森小区画AB内は1000本/haなので照度が足りない。

また萌芽更新を行うとき若いうちに切らないと新しい芽が出づらい。胸高直径20センチを超えて切ると萌芽更新に失敗することがある。もう5年もすると20センチをこえる。もし萌芽更新をするならこれから5年が伐採時期。では具体的にどのような伐採の方法がここであるのか。カブトムシの森は甲虫を誘致する森なので樹液を出す大木とする木を選択的に残し、他の木は密度をおとすように萌芽更新をする、つまりコピスウィズスタンダードが適当ではないだろうか。

《現地見学》

6人・3グループに分かれカブ森を見て回った。06年保全目標を図面化した資料を手に12のポイントを中心に計画の評価を行った。



《ワークショップ》



現地見学の内容を各班ごとに発表した。全体として作業はおおむねすすんでいるという意見が述べられた。課題として 林道からの森へのアクセスしやすさ、林内の明るさ、自然解説、材の処理・活用が挙げられた。最後にこれからのカブトムシの森の目標・活動について 各人でポストイットに記入した。全員マイベストワンを口頭発表し以下のような意見が多くみられた。

- ・森の形 全体としてクヌギ・コナラの大木+萌芽更新の森にむけたい。
- ・各地区の土地の特性を活かした森のあり方も大切に。
- ・来園者への自然解説と森の管理をセットで考える
- ・切った材の活用のシステムづくり
- ・管理者と解説・作業の連携

勉強会を終えて：森の管理は長期にわたり人は入れ替わる。目的を確かめながら活動が続けるにはこのような評価の機会とそれを支える調査の大切さを感じた。広範な知見と巧みなワークの運営で評価と今後の活動を考える道筋をつくってくださった朝廣先生に感謝申し上げます。勉強会の成果を受けて今後のカブトムシの森活動計画をカブトムシの森にかかわる世話役連が集まり検討しました。うん・えー会にはかったのち、会報でご披露いただくことになると思います。お楽しみに！(世話役・報告 柴戸慶子)